

未来創造人

中部支店
建築工事

しみず りゅうせい
清水 竜聖 さん

中学生の頃に抱いた「大きな建物を造りたい」という夢をかかなえるために鹿島道路に入社して4年。現在は大田保育園の建て替え工事で自身初のRC造に施工管理として携わっている。分からないことは経験豊富な職人たちに意見を求めることが多く、日頃からのコミュニケーションが生きてくる。気遣いすぎず気さくな関係性が築けているのは、休憩時間を共に過ごし、積極的に話しかけていく清水さんの人柄によるものだろう。しかし、職人と意見が食い違うこともあったそうだ。「私があまく伝えら



「伝える対話」で

深い関係性を築く

れなかつただけなんです。どうしても譲れない部分は、資料なども使って丁寧な対話を意識しました」と語るように、常に真摯な姿勢で壁を乗り越えてきた。

現場を見渡す場所に建つ現保育園からは、時に園児たちがベランダに並び、建設工事用の大型機材を眺めて歓声を上げる。「私にも同じ年頃の子どもがいるので、あのうれしそうなお姿を見ると頑張っちゃいますよね」とはにかむ清水さんは、今日も「親子が安心できる保育園」の完成を目指し、研鑽を重ねている。

きっと、未来に続く道

KIT PLUS

KAJIMA ROAD
Information of
Technology
PLUS

Vol. 06
2022 Summer



KIT PLUS

発行日：2022年7月20日

発行：鹿島道路株式会社 経営企画部

KIT PLUS に関するご意見・ご感想・ご要望をお寄せください。

✉ 経営企画部 名須 (nasumail@kajimaro.co.jp)



THE PROJECT

Creating the Future

鹿島道路の新たな試み

建築 × 働き方改革

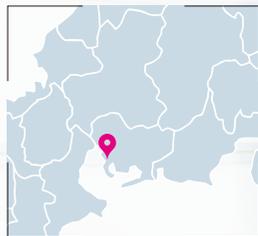
現場と本店の協働で
残業時間を
50パーセント削減へ

建設業界の時間外労働を
月45時間上限とする
改正労働基準法が
2024年4月から施行される。
今回は、建設現場の
働き方改革を推進する
建設事業部の現在と
将来的な取り組みについて、
現場・本店の双方から
話を聞いた。

About the Project

大田保育園建設工事

発注者：東海市
工期：2021年10月～2023年1月
工事場所：愛知県東海市大田町庄之脇
工事内容：鉄筋コンクリート造2階建て延べ
1,889㎡（建物建築、園庭整備、
外構、内装 ほか）



完成予定図

Innovation

働き方“大”改革を目指し 支援を積み重ねる

園舎の老朽化に伴い、東海市立大田保育園（愛知県東海市）の移転・新築工事が2021年より開始された。現在RC（鉄筋コンクリート）造での園舎建設が進められている。

2022年のはじめ、同年3月に行われる出来形検査にて、請負工事のうち15%の完了と膨大な検査書類の提出が必要となった。提出書類に求められる内容や制度はプロジェクトによっても異なるが、今回は特に煩雑な作業が想定

され、工事を並行して行う現場にとって、大きな負担となるのは明白だった。これまでも発注者とのミーティングに同席していた本店事業部の担当者は、事前にそのリスクを察知。書類作成の業務すべてを本店で担う現場支援を決断し、無事に出来形検査を乗り越えることができた。現場を仕切る丸橋さんによると、当初は長時間に及ぶ残業を覚悟していたと言うが、支援によって想定していた時間外労働の約50%を削減。現場の大き



2023年4月の開園を目指す大田保育園。園を利用する親子の笑顔の思い浮かべることが業務のモチベーションにつながる

“ お客様のために、
現場はもっと工事に集中したい ”



な支えとなったことは言うまでもない。

本店による現場支援は今回が7例目となり、全事案で残業時間の削減を達成。さらに本店事業部では、新たなシステムフローを取り入れた書類作成業務のアウトソーシング化を目指している。

例えば、必要素材をクラウドにアップロードすれば自動的に外注先に連絡が届き、本店を介さずに書類作成が開始される。このフローが実現すれば、現場の負担は最小限になり、飛躍的な効率化がかなうだろう。さらに現在進行している本店の支援活動では、一部業務のアウトソーシング化にも挑戦するという。働き方改革を実現させる準備が、着実に進められている。

現場を協力支援
原動力は“卵焼き”



現場では3割ほどの人たちが手作りのお弁当を持参している。『未来創造人』に登場してくれた清水 竜聖さんもその一人だ。取材当日、清水さんに愛妻弁当を披露してもらったところ、一番好きなおかずだという卵焼きを指してうれしそうに「妻が私好みの味付けに変えてくれたんです」と笑顔で教えてくれた。家族で互いを思う気持ちは、今回の現場の協力体制と同じように、働く人たちの気持ちを支える仕事の原動力となる。また、残業時間の削減は、大切な人と過ごす貴重な時間を増やすことにもつながっている。



ボリュームたっぷりの愛妻弁当。「帰宅後は感謝の気持ちを込めてお弁当箱を洗っています」（清水さん）

工事の一翼を担う 責任感を持って取り組む

People

現場支援に携わった本店事業部のメンバーは、中心となる小路口さん、松原さんをはじめ、篠崎さん、古館さんの4名。現場経験もある小路口さんに、後方支援にあたる思いを尋ねると、「私たちが書類作成を担うことで、現場の方たちは現場でしかできない業務に集中できます。ただ“手伝う”だけではなく、プロジェクトの一員として常に責任感を持っていました」と振り返った。万が一、期限内に書類が間に合わなければ、検査が受けられない可能性もある。1カ月近い支援

期間中は、緊張が続く日々だったそうだ。

本店チームが作成した書類は、製品証明書や施工計画書、記録写真など数百枚にも及ぶ。サポートするにあたり、松原さんは週2日、小路口さんは必要に応じて現場を訪れ、現場でしか得られない情報・資料の収集を担当。さらに情報を本店に持ち帰った当日には全員が集まるミーティングで進捗状況を報告・確認するなど、作業分担、情報共有に努めたという。「国土交通省が定める公共建築工事標準



“ 本店は現場に寄り添う存在でありたい ”

(写真左から) 中部支店 清水 竜聖/中部支店 久保 懂馬/本店 篠崎 未来/中部支店 丸橋 健一/本店 小路口 佑太/中部支店 松原 武朗/本店 古館 勇司

Project Leader

中部支店
建築工事

まるばし けんいち
丸橋 健一

2016年4月入社
東京支店で3年間現場管理を経験後、中部支店の現場で3年目を迎える。現場代理人を務められるように、現在所長の下でさまざまな経験を積み



常に緊張感を持ちながら書類作成に励む
小路口さん

仕様書と図面を特に細かく精査しました」と小路口さんが語るように、書類作成には綿密さが求められる。疑問があれば各自が現場窓口の丸橋さんに電話をして相談や確認を重ね、書類を確実に仕上げることを目標に進められた。「支援

メンバーが現場に来てくれたので密にコミュニケーションができました。期日より早く書類を提出し、さらに残業時間を削減できました。感謝しかないですね」とうれしそうに語る丸橋さんの姿も印象的だ。出来形検査が終わり、現場支

援は無事に完遂。現場を支えた4名は、別の現場に出たり、他の課題に取り組んだり、すでに新たな日々を送る。「本店は現場の業務効率改善や時間短縮のためにある」という信条を、小路口さんは最後に教えてくれた。

KAJIMA ROAD'S WORKMAN SHIP

未来を創る鹿島道路の力

土木系新入社員が工事現場を見学

DATA

開催日：2022年5月12日～13日
場所：新東名高速道路 谷ヶ山トンネル他1
トンネルコンクリート舗装版工事

土木系新入社員40名が、鹿島道路が舗装工事を手掛ける現場を見学した。A・B班に分かれて訪れたのは、新東名高速道路の谷ヶ山トンネルと、中央自動車道大月の工事現場の2カ所。両工事とも複数年にわたる大規模な工事現場だ。

谷ヶ山トンネルでは、大量のセメント安定処理路盤材を現地で製造する仮設のソイルプラントも併せて



バス内から稼働間近のソイルプラントを見学



参加者からは「いつかこういった大きな工事に携わりたい」という声も

見学したが、B班が参加した13日はあいにくの雨ということもあり、バス車内からの見学となった。車中で行われた路盤やプラントに関する説明に参加者は真剣に耳を傾けていた。質疑応答では新入社員からの「一般道路と高速道路の路盤はどう違うか」「本工事に掛かる総額はいくらか」といった質問に、現場で活躍する先輩社員が一つ一つ丁寧に回答した。

その後は約2.7kmのトンネル内を見学。丁張（構造物設置の目安の定規）が設置された、舗装前の道路を各人が興味深い様子で見つめていた。また、作業服を着慣れていない新入社員に、先輩社員が正しい着方をレクチャーするなど、安全に作業を進める心構えを説く場面もみられた。



トンネルには耐久性の高いコンクリート舗装を採用

入社式をはじめ、4月から始まった研修はすべてリモートで行われていたため、新入社員が実際に顔を合わせるのはこの日で2度目。互いに緊張している様子も伝わってきたが、現場の空気に触れ、実際の施工業務へ新鮮な印象を抱いたようだった。

参加者からは「これほど大きな現場で、実際に道路を造る過程を見てやりがいを感じた」「ある程度舗装の知識は持っていたが、丁張など現場で使われている用語やルールを知ることができ勉強になった」といった感想が寄せられた。鹿島道路の社員として初めて訪ねた現場で見たもの、感じたことは、必ずや今後の糧となるはずだ。今後の業務における彼らの活躍に期待したい。



これから本格的な舗装工事が始まるトンネル内。一同は安全第一を守りながら見学した



大規模工事の
迫力を肌で感じる！



先輩社員の説明を熱心に聞く新入社員たち

VOICE

皆さんの活躍を
期待しています



生産本部長付部長
管理本部人事部専門部長

近藤 真

ここ数年は新入社員研修での現場見学会を実施できませんでした。今年には久しぶりに各現場のご協力により実施できました。入社以来、リモート研修が続き、モニター越しにしか触れることができなかった現場のスケール感や空気を彼らに肌で感じてもらいたかった。今後、新入社員の皆さんは実務に就くこととなりますが、「自分の人生の主役は自分しかいない」ことを胸に、人に言われて動くのではなく、プロとして自分自身をマネジメントして欲しいと思います。



「育児への理解と家族の絆が深まった」
鹿島道路で初めて男性社員が育休を取得

01

育児・介護休業法が施行された1992年から、鹿島道路では多くの女性が育児休暇（以下、育休）を取得してきたが、男性の取得例がなかった。今年、男性で初めて育休を取得した九州支店大分営業所の帆玉 賢治さんに話を聞いた。

第一子が誕生した帆玉さんが育休を取得したのは今年4月から5月までの2カ月間。大きな現場の仕事が終わるタイミングに合わせ、取得を決めた。「最初は会社に迷惑をかけるのではと思いましたが、相談した上長をはじめ周囲の反応は好意的で、育休取得を応援してくれました」。

育休中は帆玉さんが家事を担当。「授乳の間隔が短く、妻は子どもにかかりきり。育児の大変さを実感しました」と振り返る。一方で「話しかけると返事をしたり、ほほ笑んだり。わが子が成長する様子を見かけがえのない経験でした。夫婦の絆も深まりました」と育休取得の意義の大きさを語る。最近仕事関係を含め、育休を取得した男性と会う機会が増えたとも話す。「社会全体、建設業でも男性の育休取得の広がりを感じます。育休は育児や家族への理解を深める貴重な機会。積極的に取得してはどうでしょうか」。男性の育休取得を広げるため、今年の4月から改正育児・介護休業法が施行された。鹿島道路でもさらに多くの男性社員が育休を取得することが期待される。

わが子の成長を実感する日々



▲ 生後4カ月の長男・充希君と。「子どもの成長は本当に早くて驚きます」（帆玉さん）



▲ 家族で訪れた大分の観光名所・狭霧台。湯布院を一望できる景色や新緑を楽しんだ



今期も社員が南極地域観測隊に参加
設営部門のスペシャリストとしてミッションを完遂

02

南極大陸で地球環境の変動を観測するなどの活動を行う南極地域観測隊（以下：観測隊）。鹿島道路は前年に引き続き、第63次観測隊（夏隊）への人材派遣を行った。参加したのは、関東支店で現場支援やICT施工支援に従事する大竹 元志さん。同氏の責任感や専門性など観測隊員に求められる資質に加え、豊富な現場経験と高い協調性が評価され、人選につながった。

現地での活動期間は2021年12月から今年2月までの約50日間。観測隊は少人数で多くのミッションを遂行する必要があり、専門外の作業も協力して進める。大竹さんが担当する老朽建物の解体や道路整備も、時には業務未経験の隊員に協力を仰いだ。大竹さんは労働災害を未然に防ぐ指導を徹底し、作業を安全にまとめあげた。

一方、自身も氷河の観測作業や、燃料や食材の運搬など、他隊員と協力しながらさまざまな業務をこなした。「大学の教授や調理担当の方など、普段の仕事では出会う機会が少ない職業の方たちとの交流を通して視野が広がりました。この経験を今後の業務にも生かしていきたい」（大竹さん）。次の第64次観測隊へも鹿島道路から1名が参加する予定だ。南極観測を、引き続き鹿島道路の技術が支えていく。



▲ 昭和基地には気象観測用施設のほか、食堂や風呂などの設備が整う。夏隊が滞在した12月から2月は南極の夏季にあたる。雪が解け、地表が見えている場所も



▲ 南極ではドローンを用いた業務も予定されている。ドローン操作の習熟を目指し、出発前に念入りに訓練を行う大竹さん